







# 徳富蘇峰記念館

## 第37回 特別展示目録

### 『徳富蘇峰愛用の印章コレクション』展

- 会期：2020年1月5日（日）～12月25日（金）
- 会場：徳富蘇峰記念館 1階
- 主催：公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団

篆刻家人物情報	解 説
<p>やまだ かんざん <b>山田 寒山</b></p> <p>安政3年～大正7年 (1856～1918)</p> <p>[出身] 尾張(愛知県) [本名] 潤子 [号] 寒山</p>	<p>曹洞宗の僧侶。寒山寺別院住職。呉昌碩の門下。福井端隠に入門し、高芙蓉の流れを汲む古体派の篆刻を学ぶ。伊藤博文の自用印を作成して名声を得た。同志と共に「丁未印社」を結成し、後進の育成や篆刻芸術の発展に尽力した。蘇峰は新聞コラムで「山田寒山の墨竹絵を大森の自宅に掲げている」と記した。*蘇峰より7歳年長</p> <p>■当館所蔵の山田寒山印章：6顆/うち展示印3顆</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"><div style="text-align: center;"><p>[徳富猪印/ 石印]</p></div><div style="text-align: center;"><p>[不如学/ 石印]</p></div><div style="text-align: center;"><p>[蘇峯/ 石印]</p></div></div>
<p>やまだ しょうへい <b>山田 正平</b></p> <p>明治32年～昭和37年 (1899～1962)</p> <p>[出身] 新潟県 [本名] 正平 [号] 一止、一止道人、更生、幾庵</p>	<p>篆刻家・山田寒山の養嗣子。寒山と同じく呉昌碩に師事。堀口大学の詩集「月下の一群」の奥付印を手掛ける。同郷の歌人で書家の会津八一と親交を深め、互いに大きな影響を与えた。晩年は日展審査員や東京学芸大学講師として、後進の育成にも取り組んだ。近代日本印壇四家(初世中村蘭台・河井荃廬・二世中村蘭台・山田正平)の一人と称される。</p> <p>*蘇峰より36歳年少</p> <p>■当館所蔵の山田正平印章：5顆/うち展示印3顆</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"><div style="text-align: center;"><p>[修史自娛/ 木印]</p></div><div style="text-align: center;"><p>[百敗院頑蘇九十五/ 木印]</p></div><div style="text-align: center;"><p>[蘇峯古希以後/ 石印]</p></div></div>



## ごあいさつ



（日本男児）

中国より伝わったとされる印章は、江戸時代になって広く日本社会に普及しました。各国ではサイン（署名）にとって代わられたその役割も、日本では未だ健在で、行政書類や文化、芸術など多方面で深く社会に根差し、独特の「印章文化」を形作っています。

若い頃より書に親しみ、全国に 200 余りの扁額や石碑を残した徳富蘇峰も、数多くの印章を使用しました。当館には蘇峰愛用の印が約 500 顆残されています。書画の落款として使われる姓名印や雅号印、そして関防印、遊印、成語印から堂号印、蔵書印、住所印に至るまで役割ごとに揃います。材質も木材や竹根をはじめ、石や陶器、磁器、金属、漆、動物の牙や角とさまざま、その形状も組み込み式になった子母印や、外出時に便利なよう、弁当箱大に各種印が納められたもの等、意匠に富んだ作品が並びます。印鈕や側款に施された見事な細工も見逃せません。本展示では、当館所蔵の印章に焦点を絞り、著名篆刻家が蘇峰のために刻し、その中でも特に蘇峰が手沢し愛用した印を紹介します。

晩年の或る日、蘇峰は友人で印人でもあった宮田武義（山水楼主人）に、固い水晶印を彫るよう依頼しました。印刀を何本も駄目にしてようやく彫り上げ、持参した宮田を蘇峰は喜んで迎え、次のような色紙を贈ったといひます。「刀法精深 波瀾老成」。蘇峰の印章に対して抱く畏敬の念が、この賛辞を通して伝わってくるようです。残念ながら、96 歳の長寿を祝うために用意されたこの水晶印（印文：「蘇叟九十六」）を一度も押すことなく、蘇峰は 95 歳で生涯を閉じました。

会場内のパネルでは、各種印の紹介や、印章がどのように彫られ、印影はどう押されるのか、その仕上げりまでの過程を写真入りで解説します。

近現代に名を馳せた印人が、当代きってのジャーナリスト・徳富蘇峰をどう表現し刻したのか。印泥の香り漂う中、印材や印面、印影に触れ、遊び心や洒脱さも備えた蘇峰の文人としての一面にも興じていただければ幸甚に存じます。

徳富蘇峰記念館

記

■特別展：「～初公開～ 徳富蘇峰愛用の印章コレクション」展

■展示印刻者：

山田寒山、山田正平、益田香遠、蘆野楠山、落合東郭、高畑翠石、河西笛洲、中道岫雲、田辺玄々、余延年、波木井昇斎、浜村蔵六、遊記山人、清水東翠、佐藤物外、津田竹堂、郡司樺所、足達疇邨、河井荃廬、岡村梅軒

あしの なんざん  
蘆野 楠山

嘉永4年～昭和5年  
(1851～1930)

[出身] 山梨県

[本名] 朗

[号] 楠山

印聖と呼ばれた高芙蓉をはじめ、山梨は多くの印人を輩出しているが、蘆野もその一人。明治5年、英国の新聞人・ブラッグが東京で出版した邦字新聞「日新真事誌」の木製ツゲ活字を依頼され作成した。大正3年開催の「東京大正博覧会」では、篆刻部の審査官を務める。展示の印は、奈良の春日大社と大仏殿の貴重な古材を使用したもの。

\*蘇峰より12歳年長

■当館所蔵の蘆野楠山印章：14顆/うち展示印3顆



[天地一閑人/ 木印]



[日本男児/ 木印]



[文章経国/ 木印]

ますだ こうえん  
益田 香遠

天保7年～大正10年  
(1836～1921)

[出身] 江戸(東京都)

[本名] 厚、重太郎

[号] 香遠、宜軒

祖父勤斎、父遇所を継ぎ、益田派三代目当主。江戸二大流派の一つ、淨碧居派を継承。安政4年、益田家は徳川将軍家より外交文書に押印する銀印「経文緯武」の製作を任せられる。明治になると太政官の官印師に指定され、様々な公印を作成。中でも、日本銀行券の「総裁之印」「発券局長」の印章は最も知られている。\*蘇峰より27歳年長

■当館所蔵の益田香遠印章：5顆/うち展示印2顆



[忠慎著書/ 石印]



[天地一閑人/ 石印]

おちあい とうかく  
落合 東郭

慶応2年～昭和17年  
(1866～1942)

[出身] 熊本県

[本名] 為誠

[号] 東郭、  
可窓夢読騷人

明治期の儒学者で宮内官僚を務めた元田永孚の孫。大正天皇の侍従。森槐南に師事し、漢詩人や書家としても有名。夏目漱石が教師として熊本県大江村に住んだ時の家主でもある。熊本に帰郷してからは五高、七高の教授を歴任した。東郭が収集した蔵書は、熊本大学付属図書館に「落合文庫」として残されている。\*蘇峰より3歳年少

■当館所蔵の落合東郭印章：3顆/うち展示印3顆



[菅正敬印/ 石印]



[独歩青天/ 石印]



[蘇峯/ 石印]

たかはた すいせき  
高畑 翠石

明治 12 年～昭和 32 年  
(1879～1957)

[出身] 東京都  
[本名] 持隆  
[号] 翠石

篆刻を山崎酔石や蘆野楠山に学び、近藤雪竹に書を学んだ。書道奨励会を設立し、雑誌『筆之友』を発刊、近代篆刻史に大きな足跡を残した。当館には蘇峰好みの印が多く残り、高畑に向けて、蘇峰が度々印の依頼を出していたことがわかる。\*蘇峰より 11 歳年少

■当館所蔵の高畑翠石印章：23 顆/ うち展示印 3 顆



[蘇峰八十以後/ 木印]



[皇紀二千六百年/ 石印]



[熱海市伊豆山押出——九]

晚晴草堂徳富猪一郎/石印]

ちゅうどう しゅううん  
中道 岫雲

[出身] 新潟県  
[本名] 修之  
[号] 岫雲、岫雲道人

側款に凝ったものや、意匠を凝らしたユニークな木印が多い。蘇峰は中道の大型印を、大書した書や軸によく使用した。\*年齢不明

■当館所蔵の中道岫雲印章：23 顆/ うち展示印 3 顆



[徳富正敬/ 木印]



[志尚存/ 木印]



[蘇峰蒙叟/ 木印]

かわにし てきしゅう  
河西 笛洲

明治 16 年～昭和 22 年  
(1883～1947)

[出身] 山梨県  
[本名] 弘(義弘)  
[号] 笛洲、看雲道人、  
看雲山人

生まれ故郷山梨の「笛吹川」に因み、笛洲と号した。日露戦争に従軍後の大正 10 年、支那に外遊。呉昌碩に面会し影響を受ける。平安書道会の評議員・審議員となり後進の育成に励んだ。昭和 22 年、関西篆刻界のため「話石印社」を設立したが、同年に病没。漢籍に精通し、特に石印材の鑑定に優れた。\*蘇峰より 20 歳年少

■当館所蔵の河西笛洲印章：7 顆/ うち展示印 3 顆



[蘇峰学人/ 石印]



[不問勲業伝千古]

却託余生作史家/ 石印]



[徳富猪印/ 石印]

は き い しょうさい  
波木井 昇斎

文化5年～文久3年  
(1808～1863)

[出身] 甲斐(山梨県)

[本名] 総之助

[号] 昇斎、五峰

篆刻家、彫刻家。甲斐身延山で代々数珠商を営む家に生まれる。江戸に出て彫刻の技術を修める。広島藩主浅野家の竹製硯箱に「七賢人」を彫ったことで名声を博し、安政3年より、藩主の命で広島を拠点に制作を続けた。蘇峰の「古印章コレクション」の一つ。\*蘇峰より55歳年長

■当館所蔵の波木井昇斎印章：1顆



[可月亭吳水/ 石印]

はまむら そうろく  
浜村 蔵六(五世)

慶応2年～明治42年  
(1866～1909)

[出身] 青森県

[本名] 裕

[号] 蔵六、無咎道人、  
彫蟲窟主人

東奥義塾で洋学を修めた。金子襄香に篆刻を学び、さらに四世蔵六に付いて、その養嗣子として五世蔵六を継いだ。中国で呉昌碩と交わり、その影響から作風が大きく変わった。初世中村蘭台らと「丁未印社」を組織。晩年は陶製文字の創作などを行った。\*蘇峰より3歳年少

■当館所蔵の浜村蔵六印章：1顆



[一雨/ 磁印]

たなへ げんげん  
田辺 玄々

寛政8年～安政5年  
(1796～1859)

[出身] 京都

[本名] 祐憲

[号] 玄々、東田居、  
尚松竹楓園

江戸時代後期の書家、篆刻家。東寺の坊官で法眼となる。頼山陽とも親交を持った。亀、虎などをつまみ(鈕)とした陶印をつくり、文人から珍重された。蘇峰の「古印章コレクション」の一つ。\*蘇峰より67歳年長

■当館所蔵の田辺玄々印章：4顆/ うち展示印1顆



[幽蘭独芳/ 陶印]

よ えんねん  
余 延年

延享3年～文政2年  
(1746～1819)

[出身] 尾張(愛知県)

[本名] 九郎左衛門

[号] 延年、墨山、  
魯台、風塵道人等

江戸時代中期から後期の篆刻家。百済の余璋王の後裔であることから「余」と称した。造り酒屋を営んでいたが、京都に出て高芙蓉に師事する。尾張大高焼の発展にも尽力。蘇峰の「古印章コレクション」の一つ。\*蘇峰より117歳年長

■当館所蔵の余延年印章：1顆



[竹亭/ 石印]

ゆうきさんじん  
遊記山人

明治 24 年～平成 5 年  
(1891～1993)

[出身] 広島県  
[本名] 宮田武義  
[号] 遊記山人

日比谷の広東料理「山水楼」主人。東亜同文書院卒。「山水楼」では徳富蘇峰をはじめ細川護立、近衛文麿、頭山満、川端康成など、政界や文化人の集会在盛んに催された。昭和 49 年の昭和天皇・皇后金婚祝宴にも、「山水楼」の料理が所望され饗された。屋号「山水楼」印は斎白石によるもの。蘇峰没後、正力松太郎や塩崎彦市らと「蘇峰先生彰徳会」を設立した。

\*蘇峰より 28 歳年少

■当館所蔵の遊記山人印章：36 顆/ うち展示印 3 顆



[蘇叟九十六/ 水晶]



[菅原正敬/ 水晶]



[熱海市伊豆山晚晴艸堂  
徳富猪一郎/ 石印]

ぐんじ ばいしよ  
郡司 棹所

慶応 2 年～昭和 9 年  
(1866～1934)

[出身] 江戸(東京都)  
[本名] 之教  
[号] 棹所

中井敬所の「菡萏居社」に入門し、篆刻を学ぶ。同門に岡村梅軒や岡本椿所、田口逸所らがいる。著書に『皇朝印史』がある。

展示の「山王艸堂」印は、蘇峰の住居(大田区大森山王)の堂号印で、用箋のロゴマークとして好んで使われた。\*蘇峰より 3 歳年少

■当館所蔵の郡司棹所印章：2 顆/ うち展示印 1 顆



[山王艸堂/ 石印]

さとう ぶつがい  
佐藤 物外

明治 11 年～昭和 27 年  
(1878～1952)

[出身] 長野県  
[本名] 恒二  
[号] 物外

医師。初代佐倉順天堂院長・佐藤舜海の婿養子。ドイツに留学し博士号を取得。佐倉順天堂 4 代目院長を務めた。千葉医専臨床研究生の育成にも尽力。書や篆刻に堪能で、『物外印譜』を残している。展示印は、昭和 7 年に蘇峰の古稀を祝うため製作された記念の「寿印」(2 顆組)。

\*蘇峰より 15 歳年少





■当館所蔵の佐藤物外印章：25 顆/ うち展示印 2 顆



[青山無限好/ 石印]



[白髪不須驚/ 石印]

<p>しみず とうすい <b>清水 東翠</b></p> <p>明治 26 年～昭和 45 年 (1893～1970)</p> <p>[出身] 栃木県 [本名] 董三 [号] 東翠</p>	<p>外交官、書家。東亜同文書院卒。遊記山人と同窓。東亜同文書院(上海)で中国語の教授を務めた。中華民国大使館二等書記官等を歴任し、中華民国公使となる。昭和天皇の中国語通訳や書道の御進講を務めた。退官後は日本クラブなどで書画を教えた。*蘇峰より 30 歳年少</p> <p>■当館所蔵の清水東翠印章：2 顆/ うち展示印 1 顆</p>  <p>[再生蘇翁/ 木印]</p>
<p>つた ちくどう <b>津田 竹堂</b></p> <p>[出身] 東京都 [本名] 重胤 [号] 竹堂、 竹堂田胤曼生</p>	<p>かねてより蘇峰と親交を結び、姓名、雅号印をはじめ、関防・堂号印など数多くの蘇峰愛用印を刻した。整然と一箱に揃えられた「蘇峰所用印」(47 顆・別ケースに展示中)は、見事の一言に尽きる。*年齢不明</p> <p>■当館所蔵の津田竹堂印章：62 顆/ うち展示印 3 顆</p>    <p>[蘇峰鑑藏金石/ 木印]      [蘇峰學人德富氏愛藏圖書記/ 木印]      [德富文庫/ 真鍮印]</p>

## [ユニークな印章、その形態]



■合作印 [印文：天地無私春又帰/ 石印]

蘆野楠山・足達疇邨・塩谷蘇江・関野香雲・河井荃廬・山田寒山・岡村梅軒による合作印

大正 7 年、蘇峰が中国で購入した印章を観るため、民友社に集まった印人・7 人が、その御礼として一つの石印に 1 文字ずつを刻した印。これ程までに著名な篆刻家らによる合作印は珍しい。側款には 7 名の刻者名が順に彫られている。

■六面印(石印) ■子母印(木印・鑄造印) ■蘇峰を象徴した用印(石印・木印・水晶) ■下駄印(石印) ■両面印(石印) ■封緘印(鉄印) ■組印 (箱入り各種木印材使用 47 顆・箱入り 12 顆) ■各種印材(寿山石、青田石、鶏血石、水晶、陶、磁、漆、自然石、象牙、古木、竹根、象牙、南瓜のへた) ■印箱と印矩、印褥など ■木額「坐看蓮岳去來雲」、「靈境会群賢」 ■さまざまな鈕の印(獅子、鹿、象、羊、亀、蛙、鯉、葡萄、蓮など) ■押印された風呂敷 ■割印のある記念品 ■愛読書に押された蔵書印 ■神代杉の文箱 ■印譜の軸

## 印章の種類

### ●白文印（陰刻）

文字の部分を彫って、捺印すると文字が白抜きで現れる彫り方、またその印。元々印章は、封泥に押印するために使われ発展したもので、粘土に押すと文字が凸状に浮かび上がる「陰刻」が、かつては正式で一般的だった。

(印文：徳富猪印)



### ●朱文印（陽刻）

文字の部分を残して彫り、捺印すると文字が朱で現れる彫り方、またその印。

紙と朱肉の普及により陰刻に代わって「陽刻」が一般的となった。現在使用される認印や役職印は殆どが朱文印。

(印文：蘇峯)



### ●朱白相間印（陰刻+陽刻）

ひとつの印面の中に陰と陽の両刻体が使われ、朱文と白文が相対し、又は組み合わせられた印章。

(印文：蘇峯六十以後)



## 展示パネル

パネル① 篆刻の全 14 行程写真(選文・検字から印影の完成まで)

- パネル②
- ・印の形式【落款印、姓名印、雅号印、関防印、堂号印、成語印、遊印、収蔵印、封緘印、住所印、紀年印】
  - ・その他の印に関する語句【篆刻、印章、印文、印影、押印、印譜、印材、側款、印鈕、印泥、印刀】
  - ・蘇峯が雅号の後に用いた付加語【蘇峯居士、蘇峯野史、蘇峯外史、蘇峯学人、鎮西老書生、青山仙客、艸莽逸民、飄然天地一閑人、伊豆山人、蘇叟九十五】 \*印影のみ展示
  - ・蘇峯の各種堂号印【老龍庵主、観瀾(亭)主人、野史亭主人、青山草堂、双宜荘、愛吾廬、鶴巢居、山王艸堂、成簣堂主、晚晴艸堂】 \*印影のみ展示

## 参考文献

・『白寿 遊記山人の書』(宮田武義 大塚巧藝社) ・『篆刻ハンドブック』(河野隆 木耳社) ・『ウルトラかんたん篆刻』(真鍋井蛙 芸術新聞社) ・『篆刻全集 10』(小林斗盞編 二玄社) ・『印と印人』(北川博邦訳 二玄社) ・『山田正平展』『収蔵品Ⅲ 印人と書』(篆刻美術館) ・『墨 十月臨時増刊 近代日本の書』『墨 臨時増刊号』(昭和 56 年 10 月 芸術新聞社) ・『お雇い外国人 17』(鹿島出版会) ・Wikipedia

2020 年 1 月 5 日発行 定価 100 円(税込)

編集 塩崎信彦 宮崎松代

発行者・発行所 (公財)徳富蘇峯記念塩崎財団

代表理事 高野 信篤

〒259-0123 神奈川県中郡二宮町二宮 605

TEL0463 - 71 - 0266

<http://www.soho-tokutomi.or.jp/>

\* 目録に転載の印影は、紙面の都合上変倍しているものが  
ございます。

\* 展示の印章は、館内の書軸にも押下されています。  
併せてご覧下さい。

\* 今回の展示に際しまして、山本陽一氏(全日本篆刻連盟  
理事)には、印文の判読から印影の作製まで、さまざま  
ご指導ご協力を賜りましたことをここに記し、厚く御礼  
申し上げます。